

JELA NEWS

ジェラニュース 第33号 2014年4月15日発行 発行責任者 森川 博己

一般社団法人日本福音ルーテル社団 〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26 Tel.03-3447-1521 Fax.03-3447-1523 jela@jela.or.jp www.jela.or.jp 口座番号 00140-0-669206 加入者名 一般社団法人日本福音ルーテル社団

難民支援／世界の子ども支援／ボランティア派遣／リラ・プレカリア(祈りのたて琴)研修講座／奨学金制度／宣教師支援

私たちは、キリストの愛をもって、日本と世界の助けを必要とする人びとに仕えます

「お前たちはわたしに飢えていたときに食べさせ、のどが乾いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ、はつきり言うておく、私の兄弟である この最も小さい者の一人にしたのは、私にしてくれたことなのである。」 マタイによる福音書 25章35節～36節40節



ソーラーランタンを手に喜ぶ子ども達

カンボジアの活動に大きな変化が!!

パナソニック株式会社から JELA のカンボジア・パートナーの LWD に「ソーラーランタン」を寄贈いただきました。今、カンボジアの僻地に変化が起きつつあります。詳しくは 2 ページ以下をご覧ください。

この号にはこんな記事が

世界の子ども支援カンボジア・レポート(JELA 支援、パナソニック寄贈) …… 2～3 難民支援事業「S さん家族の物語」(RHQ 直津晴子)、「JELA ハウス・日本語教室を経験して」(ボランティア日本語講師 土肥絹恵) 新 J3 紹介…… 4～5
リラ・プレカリア 4 期 修了(大石千絵・佐野正子) 気仙沼・前浜マリセンターで子どもクリスマス会…… 6～7 チャリティコンサート情報・「川柳ひろば」開設のお知らせ・支援者一覧・編集余話ほか …… 8



カンボジア 支援調査ツアー報告

JELA の今井哲男理事、ローウェル・グリテベック顧問、奈良部慎平職員の3名は、1月27～31日の日程でカンボジアの支援先視察を行いました。以下、現地の様子や課題等について報告いたします。(奈良部慎平)



JELA の支援で学校が完成

JELA はカンボジア農村の貧困層(特に子ども達)の生活を改善するために現地の NGO である LWD とともに活動し



ています。スラエ・ジュン・グリ村(コンポンスプー州)に JELA の支援によって学校が完成しました。学校の大きさは約7m×約4mの長方形の建物で、ドア1つ、窓が4つあります。コンクリートの基礎とトタンの屋根で総工費は、US2,000ドル(約20万円)でした。現在、3～5歳の児童が22人学んでいます。学用品(椅子、玩具、カバンなど)も JELA の支援で購入しました。学校には井戸がなく、井戸を掘るためには US2,000ドル(約20万円)が必要です。

水不足の村に給水システムを

JELA は水不足が深刻なスラエ・ジュン・グリ村に給水システムを構築するプロジェクトを LWD と共同で進めています。今回の訪問で JELA、LWD と村の代表者らによる三者協議を実施し、山の水源を視察・調査しました。専門家の測定によって村の高度が305m、山の水源となる場所の高度が332mであり、高低差の問題がないことが分かりました。また1月は乾季ですが、水源の水量が十分にあることも分かり、村人の生活水のニーズを満たすことが可能であると判断しました。JELA では長期的な保守の観点からも資材をカンボジアで調達しつつ、日本の施工技術のアドバイスをを行い質の高いものを構築していく方針です。



ソーラーランタンに喜ぶ村人

JELA の仲介により LWD はパナソニックからソーラーランタンを寄贈いただきました(関連記事 P3)。JELA はコンポンスプー州アオラル地方の僻地に届けられたソーラーランタンがどのように使われているかを確認しました。ソーラーランタンを使用している家庭の子



ども達の学習時間が1日あたり2～3時間程度増加していることが分かりました。また、ソーラーランタンは夜間の内職を可能にし、貧困世帯の労働時間を増加させることにも寄与していました。これまで照明用の燃料代に消えていた出費も抑えられていることから経済的にも助かっていると村人は語っています。人々は、「パナソニックありがとう、日本ありがとう、JELA ありがとう」と言っていました。

パートナーシップの確認

日本政府とのパートナーシップを確認するため現地日本大使館の書記官及び草の根・人間の安全保障無償資金協力担当者と協議しました。LWD について大使館もよく知っており、助成金等の申請も問題なく行えていることを確認しました。大使館は JELA の給水システムの事業に興味を示していました。

.....

JELA の活動は、皆様の寄付によって成り立っています。特にアジアの僻地では経済発展に取り残されている人々がいいます。とりわけ子ども達は生活のために労働に従事しなければならないため勉強することができません。少しでも子ども達が勉強し、貧困から抜け出せるように皆様からご支援をいただければ幸いです。



子ども達の勉強を助けるパナソニックのソーラーランタン JELA の仲介でカンボジアの貧困地域に 222 台！

LWD 広報担当 Leak Ratna

カンボジアの農村部の子ども達は、読書の灯りを自由に得られないという問題を抱えています。灯りとして利用されるのは車のバッテリーを電源とする照明や、体によくない煙を出す灯油ランプです。こういったものはお金もかかるのです。

日本福音ルーテル社団 (JELA) は、「ソーラーランタン 10 万台プロジェクト (電気のない世界の地域に 10 万台のソーラーランタンを無償で贈る企業市民活動)」を推進しているパナソニック株式会社に連絡をとり、その中の 222 台を私ども LWD がいただけるように計らってくださいました。この 222 台はすべて、LWD がカンボジアで支援する、電気のない貧困な農村部の人々にプレゼントされました。配布先は、村の保健支援グループ、LWD 提供の土地に居住する母子家庭で子どもがたくさんいる家族、コミュニティ学習センターです。ランタンの使用によって人々の生活の質が向上すること、特に教育や保健に関わる生活改善が目指されています。

ランタンをもらった一人、Iem Sokhorn さんは次のように言っています。「周りが暗くなった時にとても役に立っています。夕食の時間や、真っ暗な外のトイレに行く時、夜間に家事を行う時とか、早朝のまだ暗い中で料理をする時等に使っています」。また、「夜に長い時間勉強できるようになって、子ども達は大喜びです」と Iem さんは感謝を表しました。

この一家は、2013 年 1 月にコンボンチュナン州から、LWD が提供する土地に引っ越して来ました。三人いる娘さん達は引っ越し後の一年間、学校に行けなくて淋しい思いをしたのですが、ランタンのおかげで 1 月からまた勉強ができるようになったと大変喜んでいて、と教えてくれました。

長女の Im Channa ちゃんは 13 歳。妹たちと毎晩、前より 1 時間も長く勉強しています。彼女は、「とっても明るくて、簡単に読んだり書いたりできるの。この灯りと一緒に勉強するのが大好き！」と話してくれました。

一家の父親は以前、家の中を明るくする

ために、頭に懐中電灯のようなものを巻きつけて照らす毎日でした。これだとバッテリー代がかかるので使用時間を短くする必要があり、子ども達の勉強は一日 30 分だけでした。しかも明るさは一つ。バッテリーも大きなものが 3 本も必要で、費用はばかにならなかったと言います。

一家ではもらったランタンを日中に充電し、毎晩 6 時から 8 時まで灯りとして使用しています。「ソーラーランタンはとても便利です。こんなすてきな贈り物をくださったパナソニックと LWD、そして仲介してくれた JELA に深く感謝しています」と Iem さんは話を締めくくりました。

※ソーラーランタンは、太陽光で発電し、その電力を蓄えて夜間などに灯りとして使用できる電灯機器です。

※LWD=Life With Dignity=ライフ・ウィズ・ディグニティ(意味：尊厳ある生活)は、2011 年 1 月にルーテル世界連盟 (LWF) のカンボジアプロジェクトからローカライズ (ある国で行われるサービスなどを別の国・地域で提供する際、その国の言語・法令・慣習に合うように修正・改訂すること) した団体です。農村の貧困層の生活を改善するために活動しています。カンボジアにおける JELA のパートナーです。



難民支援

JELA ハウスに約 4 年間住んでいた S さん家族が、昨年末に定住者の在留資格を得て自立への道を歩み始めました。S さん家族と親交のあった RHQ の難民相談員、直津さんに原稿を寄せていただきました。

JELA ハウスは大きな支え ～難民 S さん家族の物語～

アジア福祉教育財団難民事業本部 (RHQ)
難民相談員 直津晴子



私は(公財)アジア福祉教育財団難民事業本部 (RHQ) の難民相談員として、難民認定申請者、条

約難民・インドシナ難民とそれらの家族の方の生活相談に応じています。S さんもその中のお一人で、2007 年に長女の出産費用の件で相談を受けたのを機に支援しています。

ミャンマー、カチン民族出身の S さんは 1999 年に留学生として来日された後、難民認定申請をし、2006 年に同じカチン民族のご主人と結婚、翌年長女が生まれました。家族で出頭した 2009 年 11 月末、ご主人が入管に収容されてしまい、幼い長女を抱え第二子を妊娠中であった S さんは、そのショックと強い不安感から重いうつ病を発症し泣き暮らす毎日でした。

1 ヶ月後にご主人は仮放免されましたが、長女は肺炎で入院、更に家賃滞納のために借家を出なければならなくなっていました。S さんや長女の状態から転居先の確保が急務でした。私も RHQ が生活に困窮している難民

認定申請中の方に支給している保護費(生活費・住居費・医療費支援)の支給を受けることになったものの、在留資格が無く就労を禁止されている S さん家族の家探しは困難を極めました。そのような時 JELA ハウス板橋に空室ができたこと、担当者の森川さんをお願いして 2010 年 1 月中旬に急遽受け入れていただくことになったのです。その際に JELA さんには滞納家賃の支払いについても一部負担していただきました。

安心して暮らせる住まいを得たことで S さんは次第に落ち着きを取り戻し、3 ヶ月後には無事に長男を出産、他団体や牧師さんなどの助けも得て暮らすようになりました。しかし国民健康保険に加入できないため病院から 200%の医療費を請求され、JELA さんに支援していただいたこともありました。

また S さん夫婦は、長女に日本の子どもと同じように集団生活を経験させたいとの思いから、比較的経費のかからない区立幼稚園に入園させましたが、経済的に困窮する中で保育料や通学定期代を捻出することは容易ではなく、JELA さんをお願いして一時期支援していただき幼稚園を続けることができました。

入居から 3 年 9 ヶ月後の 2013 年 10 月、S さん家族は念願の定住者の在留資格を得て自立への道を歩み始めました。敬虔なクリスチャンの S さん家族は、絶えず祈り、感謝と希望をもってこの年月を耐えてこられましたが、その頑張りを JELA さんはじめ多くの方々が支え見守ってくださいました。JELA ハウスの退去に際して、住み慣れた JELA ハウスの近くに新居を探されたことは、JELA ハウスでの 4 年余の日々が JELA の皆さまに支えられた心温まるものであったことの証であろうと改めて感謝しています。

最後に S さんにご主人からの感謝の言葉をご紹介します。

「日本に来て最も苦しく辛かった時

に、JELA の森川さんや RHQ に助けをいただきました。JELA ハウスでの 4 年余の間には色々大変なことがあったが、落ち着いて暮らせる家があったことは大きな支えでした。それだけでなく経済的にもサポートしていただきました。過呼吸発作を起こして救急搬送された時には病院の支払いを助けていただきましたし、娘の幼稚園の費用も助けていただきとても感謝しています。

お陰さまで娘は大好きな幼稚園を辞めずに済みました。娘は 4 月から小学生に、息子は 4 歳になりますが、子ども達のことや生活の細々したことでは、管理人の鈴木さん、中島さんにもお世話になりました。クリスマスプレゼントやディズニーランドへのご招待など、細やかなお心遣いも嬉しく感謝しています。

皆さまへの感謝は言葉では言い尽くせません。ありがとうございました。皆さまの上に神様の祝福がありますようお祈りしています。」

JELA は難民支援の一環として日本語のクラスを開講しています。今回、JELA ハウスで日本語教師のボランティアをしてくださっている土肥絹恵さんに JELA ハウスでの活動についてご寄稿いただきました。

JELA ハウス・ 日本語教室を経験して

日本語講師 土肥絹恵



今まで日本語教師としての仕事やボランティアの場を通して、いろんな国から来日した様々

な方と接してきました。そのほとんどは学業あるいは仕事上の目標を持ち、家族や友人に見送られ、将来の夢を思い描いて来日した方々です。日本語教室の場では笑顔があふれ、毎日楽しく前向きに過ごしているのを感じていました。

そんなある日、難民の方に日本語を教えるというボランティア活動に誘われました。それまでも「難民」という言葉はもちろん知っていましたが、私にとってそれは活字(辞書)での意味であり、写真やニュースで知る遠い国の難民キャンプの人々であって、身近なところに「難民」の方がいることを全く知りませんでした。

そこで、お手伝いができることがあればとお引き受けしたのがジェラハウス日本語教室でした。何度か教室に通ううちに今まで自分が接してきた学習者とは全く違い、「来日した人」という一括りにはできないのを感じました。難民の方は様々な事情を抱えていて、中には「脱出」という形で故国を離れざるを得なかった人もいます。生活のめどもなく、また誰一人頼る知り合いもないのに日本に来ざるを得なかった人達なのです。私達には想像もできない程の大きな不安や複雑な思いを抱え、一日、そしてまた一日、と過ごしています。いったいいつまで何を待てばいいのか、また長い間待った挙句にどんな結果となるのかもわからないのです。

ジェラハウスの日本語教室で出会った人達は、皆さん、いつも優しい笑顔で接してくれました。しかし、時折語ってくれた母国での体験や日本へ来るまでのことなどは私にとって衝撃的なことばかりでした。笑顔で語ってはくれますが、深い悲しみや無念さ、これから先の不安、等々を抱えていることは容易に察しの付くことです。

こういった人達は私達にどんなことを求めているのでしょうか。今も私にはわかりませんし、この先も本当のところはわかり得ないことと思います。日本に滞在している以上、日本語学習が必要なのは明らかです。しかし、もっと必要とされていることは何なのか。そこに思いを巡らせ続ける姿勢や語りつくせない不安を抱えている日々を寄り添う気持ちを持ち続けることこそが私達に求められているのではないのでしょうか。ジェラハウスの方達は幸い住居が保証されていますが、生計の維持も大変な中に

います。せめて、一人で不安と向き合っているような孤立した思いを和らげる「そっと隣り合う人」がいたらと思います。社会の中での孤立感は辛く寂しいことであり疎外感へと結びつきやすく、是非とも防がなければならないことです。

そのためには、いろんな形でジェラハウスの住人の方達と接するボランティアの数多い参加が望まれます。日本語教室は時間を共有し寄り添う一つの方法であって、他にもいろんな「寄り添い」があるでしょう。例えば、簡単な日本語会話、電車やバスなど交通機関の事や地域の情報を教えてあげる、あるいは、お互いの国の言葉や歌を教え合う、時には近くの公園に連れ立って話を聞く、または一緒に季節を感じてみる。そういったささやかで柔らかな「寄り添い」によ

り、母国を離れ、孤立しがちな難民の方々の気持ちを少しでも和らげられたらと思います。

最後になりましたが、大変貴重な気づきの機会をいただきましたこと、ジェラの方々、ジェラハウスの皆さん、そして日本語教室の先生方に深く感謝申し上げます。

.....

JELA は難民支援をはじめ、各事業にご協力いただけるボランティアを募集しています。ご興味のある方は、下記へメールもしくはお電話いただければ幸いです。皆様のお力をお貸しください。

JELA ボランティア窓口まで
jela@jela.or.jp (件名に「ボランティア希望と明記」)

TEL : 03-3447-1521

WELCOME! TWO NEW JSs!

2013 年 9 月下旬に来日予定だった ELCA (アメリカ福音ルーテル教会) 派遣の短期宣教師 2 名が、ビザ取得手続き等に時間がかかってしまい、11 月下旬に遅れて来日しました。JELA は、年末までの期間、ジェラ・ミッションセンターにて 2 人の語学研修のサポートを行いました。

ブレント・ウィルキンソンさん(ミシガン州出身)は初来日ですが、学生時代から日本人の友人がいた関係で、日本に興味を持ち、大学でも日本語の授業を 1 年間受けました。また、彼は語学にも興味があり、大学でドイツ語を専攻したほか、スペイン語とフランス語も話せるとの事。南米アルゼンチンで半年間のワーキング・ホリデーも経験しています。

ジェニファー・ロバーツさん(ウィスコンシン州出身)も初来日。今まで州のルーテルパイブルキャンプに積極的に参加した彼女は、海外でのボランティア活動にも興味を持ち、西アフリカのリベリアで 3 ヶ月間のボランティア研修を経験しました。

2013 年 12 月末で、東京での研修を終えたブレントさんは、2014 年 1 月 9 日から熊本に移転し、3 月末まで引き続き研修を受けた後、九州ルーテル学院の英語の教師として赴任しました。ジェニファーさんは、東京に残り、文京カテリーナと本郷学生センターで英語を教えています。



左から：星崎 JELA 職員、ジェニファー・ロバーツさん、ブレント・ウィルキンソンさん、森川 JELA 事務局長

「沈黙の中に」

リラ・プレカリア第4期 修了生 大石千絵 (日本福音ルーテル三鷹教会会員)

病床にある方や心身に痛みを持つ方に、ハープと歌による祈りを届ける「リラ・プレカリア」第4期は、2012年4月より開かれました。夢中で課題に取り組むうち、2013年9月、最終学期を迎え、いよいよ実習が始まりました。修了した先輩がたの奉仕する施設一きぼうのいえ、東京老人ホーム、桜町聖ヨハネホーム、救世軍清瀬病院—が私たち実習生を温かく迎えてくださり、2月には全員無事に10回の実習を終えることができました。

このたび「実習を終えての感想を」という依頼があり、自分のまとめにもなればとお引き受けしたものの、実習で得た宝物はあふれんばかり、とても言葉にできません。自分の中で咀嚼し、言葉になって出てくるには相当時間がかかりそうです。否、そもそも言葉にできる日が来るのだろうか？ 今、私はパソコンを前にして、深く考えず何でも引き受けてしまう自分の浅はかさに呆然としています。しかし、自分の性格はさておいても、この経験は深い海のように、どのように表現しても、うわべの水をかくような、それほど奥深い神秘に触れた感覚があります。

そこにあったのは、流麗なハープの技でも、朗々とした歌でもありません。驚くほどシンプルな一本の弦と歌声が響くと、利用者の方を中心に、その部屋にあるすべての人、もの、空間が静寂に包まれ、「何か」が満ちるように感じました。後日、課題テキストの中に、こんな言葉を見つけました。「沈黙は、聖霊の声を心の中によく響かせるためにある」(礼拝と音楽124号)。あの静けさの中に存在した「何か」とは聖霊だったのでしょうか？

そういえば、こんなことがありました。英語にも聖書にも通じていない母に「Jesus remember me」という曲を聴いてもらった時、母は言いました。「ねえ、こ

れって、神様が『私はそばにいるよ』って言ってる？」また、60代の知り合いは聴き終って、「私たちって、普段は絶えず心の中で『あれしなきゃ』とか考えてるよね。でも、この時だけは、なんにも考えてない。『無』になって、安心してられる」

と教えてくださいました。聖霊の声は繊細で、沈黙の中でこそ感じ取れるものなのかもしれません。それにしても、こんなに簡素な道具の中に神様が働いてくださっているなんて！ 驚きとともに感謝があふれます。

私は受講中に洗礼を受けました。遅まきながら、ようやく神様からの愛に気づき「はい私も」とお答えしたところです。相変わらず忘れてしまうこともあります。そのたび神様のみこころに立ちかえりながら、ハープを携え、与えられる道を歩んでいきたいと思います。

第4期リラ・プレカリア研修講座修了式を行いました

2014年3月6日に第4期リラ・プレカリア(祈りのたて琴)研修講座の修了式を行いました。リラ・プレカリア研修講座は、ハープと歌の祈りを届けるボランティアを養成する講座です。

第4期は、大石千絵さん(JELC 三鷹教会)、荻野玲子さん(高林聖書バプテスト教会)、小野崎良子さん(カトリック小野幌教会)、佐野正子さん(JELC 藤が丘教会)の4人の方が無事に修了されました。修了式には修了生の友人・知人ら約40人が

集まりました。今後、修了生が遣わされる先で利用者(患者・入所者)様を先生と仰ぎ、一期一会を大切に奉仕活動をされますことを事務局一同心より願っております。皆様どうぞこの4人の修了生の活動のために祈り、サポートしていただければ幸いです。



「神の指先」

リラ・プレカリア第4期 修了生 佐野正子(日本福音ルーテル藤が丘教会会員)

リラ・プレカリア(以下LP)4期生は、この3月に2年間の研修を終えました。修了に向けた集大成として、施設での実習の機会が与えられました。ここでご紹介したいのは、私の実習最終回(10回目)のエピソードです。

60代のKさんは、おそらく癌末期にあり、ご家族(娘さんと息子さん)が補助ベッドを入れて付き添われていました。私たちは患者さんの呼吸に合わせて音楽を奏でるようトレーニングを積んでいますが、Kさんの呼吸は非常に微弱で捉えることが難しく、逆に頸動脈は驚くほど激しく脈打っていたため、脈のスピードに曲を合わせることもできず、一瞬にして私の頭の中は真っ白になってしまいました。「落ち着かなければ!」と深呼吸

し、無我夢中で弾き始めたのは、神の慈しみと愛を讃美するテゼの曲でした。すると、私の心の動揺にもかかわらず、弾き始めたその瞬間、ある種の不思議な力が働いたのです。一緒に聞いて下さっていた娘さんのすすり泣く声、続いて息子さんの鼻をすする音。その後の約20分間、奉仕が終わるまでずっと、ティッシュBOXがお二人の間を往復していました。経験不足の私は、もらい泣きをしないように歌うことで精一杯でした。

この時のことを振り返ると、「きっと神様の指先が…」と思うのです。悲しみや悔しさなど言葉にできない感情を抑え込み、張りつめていたご家族の心。そこに神様の指先がポンと触れることで、まるで玉羊羹(小さな風船入りで、楊枝で突くと皮がむける和菓

子)の様に、抑えていた気持ちがつるんと表に出てしまったのではないかと。「私の前では、ありのままでもいいんだよ」という神様の慈しみの御声が聞こえてくるような気がします。

LPを受講する私に、「死にゆく人に寄り添うのもいいが、先の未来ある人々のために働くほうがもっといいのではないか」というアドバイスをくれた知人がいました。その考え方も間違いではなく、青少年の教育問題など取り組む必要のある分野は山ほどあります。しかし、実習の経験を踏まえて、今、私が言えることは、LPの働きは決して『死』にフォーカスしているのではないということです。むしろ、すべての人の『生』を慈しむことなのです。死を間近に控えた方に歌とハーブで寄り添うことは、同時にその方の『生』を支えてこられた大切な方々への祈りにもなり、ひとつの大きな光に包まれた温かい空間を生み出します。それは、ハーブを奏でる者の業なのではなく、神から贈られる愛と慈しみの光なのだと感じています。

東北被災地で子どもクリスマス会開催



2013年12月21日(土)、JELAの海外ワークキャンプを経験した青年たちが、ルーテル教会救援JLERが建設に協力した気仙沼前浜コミュニティセンター(正式名称:東日本大震災復興記念前浜マリセンター)を訪れ、地元の女性グループ「ゆる〜く」の方たちと一緒にクリスマス会を開催しました。

前日、夜に仙台入りしたメンバーは、仙台教会でオリエンテーション&夕食会をし、翌朝8時に仙台を出て気仙沼に向かいました。途中、南三陸町の志津川に立ち寄り、解体するかどうか揺れている防災庁舎などを見学しました。

お昼前に前浜コミュニティセンターに到着。センターには地元の方が用意したというモミの木が設置され、内部

でもクリスマスらしい飾り付けがされていました。

リハーサルの後、13時からクリスマス会がスタート。初めにクリスマスの歌を数曲歌い、JELAの中川理事長よりJELAの活動と青年たちを紹介して、JELAと地元の女性グループが用意したゲームタイム。体を使ったじゃんけんやジェスチャーゲームなど、子どもたちはおおいにはじけていました。そしてゲームの後、ハンドベルで数曲演奏し、その後、「あわてんぼうのサンタクロース」と「きよしの夜」を大合唱。最後は、お待ちかねのサンタクロースの登場。子どもたちにとってもメンバーにとっても楽しい時間になりました。

JELAでは今後もこうした活動を前浜などで続けていきたいと考えています。(JLER「となりびと」ブログ参照)

世界の子ども支援チャリティコンサートを今年も開催します

第11回 JELA のチャリティコンサートが下記の会場で行われます。
奏者はフルートの上野由恵さん、ピアノの圓井晶子さんです。皆様のご来場を心よりお待ちしております。

■ 5月17日(土)午後2時

日本福音ルーテル岡崎教会

■ 5月18日(日)午後2時

日本福音ルーテル神戸東教会

■ 5月25日(日)午後2時

日本福音ルーテル長野教会

■ 5月31日(土)午後2時

日本福音ルーテル博多教会

■ 6月1日(日)午後1時30分

日本福音ルーテル熊本教会

■ 6月7日(土)午後2時

日本福音ルーテル松本教会

■ 6月15日(日)午後1時30分

日本福音ルーテル保谷教会

※会場・時間については変更になる場合がございます。JELA もしくは会場教会にご確認ください。

本誌で「川柳ひろば」をはじめます！

「カニ料理多弁な客を無口に」「ウンチだな赤ちゃん急にまじめ顔……」。ちまたでは川柳が人気のようです。五・七・五に巧みに盛り込まれたユーモアがもたらす癒し効果のせいでしょうか。日々の生活をいくぶんユニークな視点から眺め、短い句をひねり出すことで、互いの人生を豊かにできたら素晴らしいですね。ちょっとした経験や出来事の分かちあひから、あなたの世界が広がるかもしれません。

ついにと言うか、ようやくと言うべきか、ジェラニュースでも皆様の交流の場として、「川柳ひろば」を開設することになりました。ここに謹んでご報告申し上げます。作り方や実例を知りたい方は、柏木哲夫著『癒しのユーモア』(三輪書店)、同『ベッドサイドのユーモア学』(メディカ出版、この本の第4章は必読!)、近藤勝重著『しあわせの五・七・五』(幻冬舎)等がわかりやすいです。冒頭の2句は『癒しのユーモア』に掲載されていたものです。著者の柏木先生はクリスチャンであり、ホスピスケアの第一人者としてつとに有名ですが、川柳にも造詣が深く、ライフワークとして取り組んでおられます。「川柳ひろば」にうってつけの経歴であり選者をお願いしたところ、快諾してくださいました。あとは皆さんの投稿を待つばかり。年3回のジェラニュース発行ごとに、選者のお眼鏡にかなった、ほのぼのした作品を掲載できればと思っています。

風揚げ大会が風を揚げる人なしに成立しないように、「川柳ひろば」も作品提供者なしでは成り立ちません。興味のある方、新しく始めたい方は、何はともあれ作品をお寄せください。一度に何句送ってくださっても結構です。よい句が浮かんだらすぐ、さほどよいと思えない場合もとにかく、気軽に送り続けるのが上達への近道です。「川柳ひろば」から、「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と

共に泣きなさい」(ローマの信徒への手紙 12章 15節)という聖書のことを、いくぶん変則的な形で実践する輪が広がることを期待しています。「ジェラ川柳ともに喜び泣くひろば」

(JELA 事務局長・森川博己)

<投稿要領>

- ・未発表の自作に限る。本名を公表したくない場合、ペンネーム(柳名)を付記のこと。
- ・宛先は、150-0013 渋谷区恵比寿 1-20-26 JELA「川柳ひろば」。電子メール(jela@jela.or.jp)、ファクス(03-3447-1523)でも随時受け付け。
- ・入選作はジェラニュースに掲載し、その作者には星野富弘・詩画葉書セットを贈呈。
- ・投稿作品は返却しない。投稿作品の使用権・著作権は JELA に帰属する。

<選者・柏木哲夫氏>



学校法人 金城学院 学院長/淀川キリスト教病院理事長/淀川キリスト教病院名誉ホスピス長/大阪大学名誉教授/ホスピス財団理事長

JELAホームページをリニューアルしました



<http://www.jela.or.jp>

(2013年10月1日～2014年1月31日)
青木孝士、穂田信子、浅見正一、荒井和子、阿波田絹子、安藤淑子、飯島早苗、池田賢治、石川吏志・美代子、石原京子、市原周子、伊東節子、岩崎高紀、浦和ルーテル学院、江越倫子、大塚眞佐子、カトリック徳田教会、紙谷守、河合英子、カンバーランド長老キリスト教会国立のぞみ教会、キャロル・サック、九州学院みどり幼稚園、九州ルーテル学院中学・高等学校、京谷信代、小泉小枝、小菅可代・裕司・十六夜、後藤幸子、小宮俊作、斉藤正恵、酒井恵美子、佐藤たか子、霜尾閑子、セントルークルーテル教会、高尾堯、タカギノリコ、高安洋子、武田光世、竹淵三和子、竹森洋子、立山久美子、田中美紗子、玉名ルーテル幼稚園、柘植春子、辻美貴、出村由利子、東郷優子、鳥飼勝隆・豊子、中川浩之、那須響、西垣親子、西立野園子、野田マサ子、芳賀直哉・美江、早瀬康平、肥塚信、廣幸朝子、瀧田康穂、古川文江、古屋四朗、前川隆一、松隈貞雄、三浦三知子、南節子、宮下昭子、宗方美代子、森保宏、八坂由貴子、安みぎわ、山内恵美、山川泰宏・泰子、山崎恵美子、山田芙美子、山本一男、山本武子、山本了、ルーテル学院大学、若原奇美子、渡邊聡、渡辺純子、JELC(市ヶ谷教会/大分教会/大岡山教会教会学校/蒲田教会女性会/釧路教会/玉名教会/知多教会/都南教会/同教会学校/箱崎教会女性会/保谷教会/同女性会) 他匿名複数

順不同・敬称略

ご支援ありがとうございます。匿名をご希望の場合は、ご送金の際にお知らせ下さい。

編集余話

米国のレーガン元大統領(共和党・俳優出身)が在職時に狙撃された直後の話。心配顔の記者に「俳優の時だったら(弾を)簡単によけられたんだがね」と語ったとか。傷を手術する医者を出た言葉は「君たちは共和党員だろうね」。医者も負けてはいません。「今日だけは共和党員です。ご安心を」と応じたそうです。さすがユーモアの国、アメリカですね。ホスピスや病院では最近、医療従事者・患者間のユーモアを含んだ会話がもたらす効用が注目されています。思わず微笑みがもれ、勇気づけられる、そんな川柳のいくつか、「まじめ」なジェラニュースの一隅を占めるのも悪くないのではないのでしょうか。入選作しか載せませんので心配・遠慮は無用。どしどしご投稿ください。「笑いましょ薬飲むより笑いましょ」(近藤勝重著『健康川柳 一日一句医者いらず』幻冬舎、所収。山本光雄作)(M)

JELA

Japan Evangelical Lutheran Association

一般社団法人日本福音ルーテル社団